

笹淵友一著「永井荷風一「墮落」の美学者一」

立川, 昭二郎
広島修道大学教授

<https://doi.org/10.15017/12109>

出版情報：語文研究. 43, pp.62-64, 1977-06-01. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

笹淵友一著 「永井荷風——『墮落』の美学者——」

立 川 昭 二 郎

ここに永井荷風の研究に一つの新しい世界が開けた。従来、荷風が様式と美を愛する耽美派、デカダンスの作家であるところから、また、極めて個性的な人間であることから、この側面での論評は、荷風の持つ魅力に心酔欽慕し魅了されてしまふにしろ、また逆に彼の文学的な資質や思わせぶりなポーズ、韜晦性に反撥するにしろ、荷風文学の実体の周囲を徘徊するに終つてしまふか、彼の文学の本質に鋭く迫るものがあつても、とかく印象主義的なものでしかないという傾きがあつた。しかしこの著作では、荷風文学の耽美的性格が、「墮落」の実体が統一された著者の論理と倫理によつて明らかにされ、それらは具体的な博引旁証と整然たる精緻な論理によつて裏打ちされ、間然するところがない。

内容は三つの部分から成つてゐる。第一部の「序説 耽美主義文学序説」では、近代日本の耽美主義に関係の深いポオ、ボードレール、ペイター、ワイルドと、荷風——「無頼意識」、潤一郎——「悪魔主義」、龍之介——「末期意識」の三人の作家がとりあげられてゐる。そしてこれは耽美主義について「徹底した認識を確立するためには彼らの耽美的意識を規定している下部構造としての世界観を明

らかにする必要がある。」「耽美主義の世界観として重要なのは『墮落』の観念である」という著者の認識に基づいてのものである。

第二部では著者が荷風の耽美主義に重要なかわりを持つと考えられた十一の作品「あめりか物語」「雲（ふらんす物語）」「監獄署の裏と新婦朝者日記」「飲茶」「腕くらべ」「おかめ笹」「雨瀟々」「つゆのあとさき」「ひかげの花」「澤東綺譚」「問はずがたり」について、年代順にそれぞれの耽美的性格が比較文学的なアプローチも交えながら十分に論じられてゐる。例えば「あめりか物語」について「最も重要な意義は、荷風の文学が自然主義から耽美主義に大きく傾斜したことにある。比較文学的に云えば彼の関心はゾラからモーパッサンに移動した。そして更にボードレールが大きく彼の視野を占めるに至つた。しかもモーパッサン、ボードレールの理解には荷風独自の歪曲があり、それによつて彼の耽美主義の性格が形成された。この事實は荷風文学の将来を決定する重要な基礎作業としてとくに注目を要する。」と述べられ新しい観点に立つての「あめりか物語」論が展開されている。また、「雨瀟瀟」では従来の「東洋文人的な美的」世界をそのまま評価許容してはならず、下部構造

としてのヨウさん金卓山人の人間論的追求からすれば、所詮その美的世界は「擬似物」でしかないと断じ、「雨瀟瀟」の下部構造は、荷風の知性と愛情の欠乏を証明するこの作品の恥部である。」

「雨瀟瀟」は主観と自然現象との間においては調和が、そして「ものの哀れ」が成立しているといえる。しかしより重要な主観と人間、社会との間には完全な断絶、疎隔がある。愛の代りに軽蔑がある。このように社会に対して孤高、独善を誇示しようとする心情が「ものの哀れ」と異質のものであることはいうまでもない。以上の意味で「雨瀟瀟」は悲劇的でも純粹に「ものの哀れ」的でもない。しかも表面的な情調としては幾分そのどちらでもある。即ち本物ではない、擬似物である。」という犀利峻厳な批判がなされている。

第三部は、「総論 永井荷風の文学」で、その「二」として「永井家」をとりあげ、「家系、家庭環境」が荷風の「耽美主義」に与えている影響を重視し、「二」の「柳浪からゾラへ」では、「雨瀟瀟」以降の荷風の人間的なものの復活に関連して、この習作時代が「荷風文学の認識と評価に決定的意義をもつ」として精細な検討を施し、ユニークな所論が提出されている。そして「三 耽美主義の成立」を「あめりか物語」「ふらんす物語」とし、荷風にとって「最も顕著なる思想の変遷期」であるとして、以下戦後の「八 耽美主義の残照」まで半世紀を超える荷風文学の「耽美主義的個性を有機的連関性のもとに」荷風文学史として「高い密度」をもって追跡しておられる。人間の復活について著者は、「雨瀟瀟」から「つゆのあとさき」「ひかげの花」を「耽美趣味の下降」時代として捉え、「溼東綺譚」はその「下降の終点」であると同時に「精

神」の復活の「序曲」であると考え、「価値的にはむしろ荷風文学のこの新エポックを代表する位置を占める」重要な作品と断案されている。さらに第二部の「溼東綺譚」のなかで、大江とお雪の人間関係を「お雪のイメージに対する大江の反応の注目すべき点は官能的欲望の臭味が全くなく、彼女の印象によって過去のなつかしい幻想の再現という情緒の世界に導入されていることである。それは従来の荷風文学のような官能的価値認識ではなく、お雪の人間の価値の認識というべきものである。」と書かれ、大江が「お雪を他者として認識した」ものとして肯定的に評価されている。これはさらに戦後の作品「秋の女」の評価につながるのである。

以上、この大著の一部をかいたでして来たが、この著作の意図は「荷風文学の唯美的様式を確認し、それによってその比較的個性を明確にすること」であったが、荷風文学史のなかで「雨瀟瀟」をその「分水嶺」と見、これによって前期の文学は「官能的、肉体的、感覚的、非人格非倫理的、形而下的、無思想不毛」な「エゴイズム、非社会的、無類性、都会性」濃厚な「若さのもつ好色、美的貴族主義」の「偏狭かつ貧しい耽美主義」であり、後期のそれは「官能主義の呪縛から解放され」「精神的、人格的人間関係、人間愛的な抒情性」と、従って「他者の存在、田園性」を「老化」の結果として持ちつつあり、また所有し得た「豊かな耽美主義への成熟」の文学として、荷風文学全体を俯瞰したところに、この大著の大きな特色があると見るべきであろう。

終りに、読後の感想の一つとして、荷風の近代的自我について付言しておきたい。著者は中村光夫氏の荷風の「個人主義」論に対して、「人間の欲望の積極的主張という点においては近代的である

が、自我の欲望の対象として他我―女性―が欲望の手段に化し、眞の他者性に欠けている」と指摘され、それは「眞の個人主義でも近代的でもない」という考え方を述べられている。さらに「第七章雨瀟瀟」では、中村氏の見解は「荷風の言葉を顔面通りに買い被った嫌い」があり、荷風の「根本思想」とは「欲望の尊重、欲望の自由」であり、「そしてその欲望は何よりも彼自身の欲望である」と論じておられる。荷風は鷗外や漱石に比して、その洋行のあり方から帰朝後の生活や文学の営為において、常に「公」的ではなく、「私」的であり得た気安さがあった。これは著者の指摘される荷風の「甘え」に通じるものであろう。この「甘え」が社会に対する眞に厳しい対決を生半可なものにさせたことは否定することは出来ない。そこからする彼独自の個性的な西歐文化、日本文化の解釈、受けとり方も生じた。しかし、明治政府によって進められた近代日本の社会のあり方、その跋行性と擬似性、またそれに乗っていった日本の知識人たちの「近代精神の欽如」を見抜いていたのは荷風であったということ、「私」的であったが故に日本の歪みが鮮明に見えたということもあり得たのではないか。荷風の「根本思想」を狭い「欲望の尊重、欲望の自由」に押し込めてしまうのには、いささかの逡巡がある。荷風の父親や国家社会への反感反応のなかには、荷風自身がその客観的な意味を十分に自覚し得なかった、眞誠な自我が潜んでおり、そしてその自我を荷風は彼の資質から、文学のなかで深化成熟させることが出来なかったのではなからうか。この点、博士の御教示を乞うと同時に、この大著への敬意と、博士の御健康をお祈りする次第であります。